

発声指導を用いた幼児の表現活動におけるコンピテンスと 感性的表現力の向上の取り組み — 5 歳児への第2回目の指導と考察 —

長 川 慶
岐阜聖徳学園大学短期大学部

Efforts to improve competence and emotional expressiveness in preschool
children's presentation activities through singing instruction :
Follow-up instructions for 5-year-old children and a subsequent analysis

Kei NAGAKAWA

キーワード：発声指導 幼児 領域表現 歌唱 頭声

I. はじめに

幼稚園、保育所、認定こども園を問わず、現在の幼児教育の現場では、歌唱活動が盛んにおこなわれている。筆者は2016年よりおこなっている保育現場でのフィールドワークを通じ、歌唱活動は領域の枠を超えて幼児の生活そのものに溶け込み、幼児教育において重要な役割を果たしていることを確認した。しかし一方で、幼児たちは歌う際に力任せに声を張り上げ、まるでどなるように歌う姿も散見され、改善の必要性を感じた。そしてそれと同時に、現場の保育者との情報交換において「歌唱指導の方法がわからない」「どなり声が改善しない」という声が多く寄せられ、保育現場で使える歌唱指導メソッドの整備が急務であることも実感した。

そこで、2019年より保育者向けの歌唱指導メソッドの開発プロジェクトをスタートさせた。歌唱指導メソッドは、幼児の発達に沿った無理のないものであること、そして現場の保育者に高度な演奏技術や音楽的知識がなくても使用できる実践的な指導法を目指している。これらの目標を達成するため、歌唱指導メソッドの構築は実際に保育現場で幼児たちに歌唱指導を実施し、それを現場の保育者とともに検証・評価し、改善を図る手順でおこなっている。開発プロジェクトは現在も継続中である。

本稿では、年長児におこなった第2回目の指導に焦点を当て考察をおこなう。この活動を取り上げる理由は、本時の活動が幼児たちの興味を引いたこと、また、歌唱指導の第一歩となる発声指導においても一つの足掛かりになると考えるからである。本プロジェクトでは、最終的に歌唱指導メソッドの体系化を目指しているが、本稿で取り上げる活動は、歌唱指導メソッドのファーストステップのモデル活動として扱うことを検討している。よって、本稿を通じて改めて活動と指導方法を考察し、メソッド開発の一助としたい。

なお、本プロジェクトの前提となるどなり声での歌唱の問題点、歌唱指導メソッドの必要性については注・文献の1)、発声方法の考え方については2)3)、プロジェクト全体の研究構想については4)を参照いただきたい。

II. 指導の計画と概要

1. 指導の概要

指導は、重点協力園（モデル園）のA幼稚園およびB幼稚園で実施した。詳細は以下の通りである。A幼稚園、B幼稚園ともに岐阜市内の私立幼稚園で、本プロジェクト開始以前はリトミックなどの特別

な音楽活動をおこなっていなかった。

(1) A幼稚園

- ・実施日：2019年6月10日
- ・実施形態：学年全体への一斉指導

(2) B幼稚園

- ・実施日：2019年7月10日
- ・実施形態：クラス別に指導（年長3クラスを1クラスずつ計3回指導）

2. 指導計画

本時（第2回目）の指導では、以下の2点を念頭に指導案を作成した。

- A) 裏声の概念（声の出し方）をつかむことができる。
- B) 声にはいろいろな種類がある（出せる）ことに気づく。

※B) は第1回目の指導でもねらいとして設定

本研究では、裏声での歌唱が大きな特色となっているため、A) を研究全体の第一到達目標課題として設定した。また、A) の目標を達成するために、幼児が声そのものに興味・関心を示すことが大切であると考え、B) を設定した。さらに上記2つに加えて、曲の途中で協和音・不協和音のいずれかを弾き、それぞれ決まった動作をさせることで、幼児たちが音を聴き分け、音に反応する活動も取り入れた。本プロジェクトでは、指導（音楽活動）が遊びと連動することを重要な目標にしていることから、指導全体を通して、活動が遊びそのものとなるように計画を立案した。

今回の指導では、下記の曲を用い、活動をおこなった。

使用曲：「うちゅうせんのうた」（ともろぎゆきお作詞・峯陽作曲）⁵⁾

活動の主な手順は、以下の通りである。

- ① 「うちゅうせんのうた」の歌の部分（譜例1）に合わせて行進する（図1）。
- ② 曲中に出てくるカウントダウン（譜例2）の部分に入ったら、その場にしゃがむ（図2）。そしてカウントダウンの最後に高い音で協和音が聞こえた場合は、ロケットの発射が成功したこととして、ロケットになって（両手を頭の上に組んで）飛び上がる（図3）。低い音で不協和音が聞こえた場合は、発射失敗でその場に倒れこむ（図4）。
- ③ 発射成功の場合は①に戻る。発射失敗の場合は、腕を回しながらサイレンを鳴らして消防車を呼ぶ。その際サイレンは裏声で表現する。消防車が到着したら、消火するつもりでホースから水が噴き出る音を表現する。
- ④ ①～③を繰り返す。
- ⑤ 活動の最後に「夕焼け小焼け」（わらべ歌・譜例3）を裏声で歌唱する。

ねらいとして特に重要視したのは、③のロケットの発射が失敗したときに、消防車を呼ぶサイレンを裏声で表現する部分である。筆者は、裏声の活用が変声期前の児童と成人女性の発声指導にとって有効であり、裏声の感覚をつかむためにサイレンの真似が効果的であることを拙稿で述べた。また、裏声を出している限り、大きな声を求めてもどなり声にならず、響きのある声になり、共鳴を理解するうえで役立つことも指摘した^{2) 6)}。よって、今回の指導でサイレンの真似を取り入れることで、幼児たちが裏声の感覚をつかみ、さらに響きのある声を認識できるのではないかと考えた。

なお、指導の詳細については、表1の指導案の通りである。



図1 譜例1に合わせて行進する



図2 譜例2カウントダウン



図3 ロケット発射成功



図4 ロケット発射失敗

※図1～5はいずれもB幼稚園での活動の様子



譜例1「うちゅうせんのうた」(ともろぎゆきお作詞・峯陽作曲)⁵⁾



譜例2「うちゅうせんのうた」(ともろぎゆきお作詞・峯陽作曲)⁵⁾

表 1 指導案（両園共通）

子どもの活動	保育者の援助・留意点
<ul style="list-style-type: none"> ● 大きな円になって座る。 ● 今日の活動は、宇宙船の打ち上げであることを知る。 ● 「うちゅうせんのうた」を聴いて活動への期待をもつ（知っている子と、知らない子がいる）。 ● 発射成功と失敗の音を聴き取る。 ● 保育者の指示に従い、カウントダウン→発射（成功バージョン、失敗バージョン両方）の練習をする。 ● サイレンと水が噴き出る音の練習をする。 ● 宇宙船打ち上げの活動を楽しむ。 ● サイレンの声でわらべ歌（譜例3）を歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 全員を大きな円にさせ、座らせる。 ● 今日のミッションは宇宙船の打ち上げだと伝える。 ● 「うちゅうせんのうた」を弾き、この曲を知っているか聞く。そして、この曲に合わせてロケットの発射場まで歩いて行こうと提案する。 ● カウントダウン（譜例2）の部分で、ロケットが発射することと、発射が失敗する場合があることを伝え、音で示す（高い協和音→成功、低い不協和音→失敗）。 ● カウントダウンの時は、その場に立ち止まり、しゃがんで発射を待つように言う。成功の時は、“ビューン”と言いながら、飛び上がり、失敗の場合は、その場に転ぶように指示し、その練習をする。 ● ロケットの発射が失敗したときは、すぐに起き上がり、腕を回しながらサイレンを鳴らし、消防車を呼ぶように言い、サイレンの手本を示す。また、消防車が到着したらホースから勢いよく水が噴き出る（消火している）シューッという音を真似する。 ● サイレンと水が噴き出る音の練習をさせる。 ● 活動を行う。その際、曲を知っている子は、歌いながら歩くように伝える。活動中は音に集中しているか常に注意をはらう。打ち上げ失敗を多くして、楽しさの中でサイレンの音（裏声）を多く経験させる。 ● 夕方になったので、「夕焼け小焼け」のわらべ歌（譜例3）を歌って帰ろうと働きかけ、活動の終わりとする。「夕焼け小焼け」はサイレンの声を応用する。



譜例3「ゆうやけこやけ」(わらべ歌)

Ⅲ. 考察

1. A幼稚園での実施について

(1) 筆者のリフレクション

A幼稚園では、表1指導案の通り指導を実施した。

幼児たちは、今回の活動に対して非常に意欲的で、生き生きと楽しそうに活動に参加している様子うかがえた。特にロケット発射の成否の部分が楽しかったようで、カウントダウン（譜例2）に入ると声を合わせて数を数え、発射の後には成功・失敗に関わらず、大きな喚声があがった。

裏声についても、サイレンの真似を通じて、第1回目の指導時よりもスムーズに出ているように感じた。もちろん、すべての幼児を個別にチェックしたわけではないので、正確な実数については不明であるが、指導者の感覚としては、少なくとも8割近くの幼児が裏声を出せていたのではないかと感じた。

しかし、一方で問題点も見られた。前述の通り、本活動の要の部分は、消防車を呼ぶサイレンの真似である。しかしながら、幼児たちはロケット発射の後、笑ったり、となり同士で話し始めたりして、最も肝心の発射失敗→火事→サイレン→消防車の流れがスムーズにいかなくなってきた。これは、参観教員からの意見にも見られるように、ロケット発射の成否が楽しく、その後の流れに十分な意識が向かなかったことが原因と考えられる。さらには、学年一斉指導であったため、50名近くの幼児たちが一度ざわつき始めると、なかなか指導者（筆者）の言葉が届かず、活動が途切れてしまう場面も何回もあった。

A幼稚園での活動は、「遊びと連動する」という観点では高い成果があったと考える。しかしその半面、幼児たちは裏声を出せたものの、指導の主たるねらいであった「裏声の概念（声の出し方）をつかむ」「いろいろな声の種類がある（出せる）ことに気づく」ことを十分に達成できたとは言えず、課題も残る結果となった。

(2) 参観教員のリフレクション

- ① 前回の振り返りがあってよかった。できなかった子が今回はやろうとする姿がみられた。
- ② 先生の認めたり褒める仕掛けが欲しい。「この子の声、いいね」→「みんなの前で見せてくれる？」というようなものがあると、競争心をあおられて浸透していく。集団の前だと緊張してしまう子もいるので、複数人でやったり、子どもの選定（普段の生活を知る担任が行う）などの配慮が必要にはなると思うので、事前に認識をあわせておく。
- ③ 手本が増えてよかった。子どももイメージが付きやすくなった。
- ④ ロケットの発射成功の声出しが少なかった。
- ⑤ サイレンの真似から裏声は良かったと思う。しかし、それ（裏声）が必ずしもそろっていなかった。
- ⑥ 曲のテンポが速くなり、発射まで早くなっていくのはよかった。子どもも高揚して盛り上がった。
- ⑦ ロケット発射のほうが楽しく、サイレンは重点的にできていなかったのではないかと。サイレンに意識が向いていたかは疑問が残る。

2. B幼稚園での実施について

(1) 筆者のリフレクション

B幼稚園での指導は、第1回目の指導の復習からスタートした。第1回目の指導でおこなった幼児たちが汽車になる活動を取り入れ、汽車になってロケットの発射場に行くという設定で指導をスタートした。汽車になる活動では、第1回目の指導と同様に、「ポッポー」という汽笛の真似を裏声でおこなわせた。そして「この前より上手になったね」「きれいな汽笛の音が出せるようになったね」などの声かけをして、声により意識を向けることとした。

以降はA幼稚園の指導と同じ手順でおこなったが、「幼児たちが楽しむ」という観点ではB幼稚園でも成功であった。幼児たちは非常に楽しそうに活動に参加し、笑い声や喚声絶えぬ活動となった。B幼稚園の幼児たちもやはりロケットの発射の成否が楽しいようで、カウントダウンが次第に速くなっていく様子から「早くロケットの発射をしたい」というわくわくした気持ちが伝わってきて、この活動が幼児たちにとって“楽しい遊び”となっていることが実感できた。B幼稚園ではクラスごとに活動を行ったため人数も20名強と少なく、人数に起因する混乱も起きず、順調に活動をおこなうことができた。

裏声についても、第1回目の指導よりもスムーズに出すことができたと感じた。特に活動の最後の「夕焼け小焼け」の歌唱では、胸声（話声）が聞こえず、裏声だけが聞こえてきた。ただ、裏声を出せる幼児のみが歌っており、裏声がうまく出せない幼児は声を出していなかった可能性もあるが、次の活動への期待を抱かせるには十分な成果であった。

しかし、B幼稚園でもロケット発射の成否に幼児たちの関心が集まり、A幼稚園と同じ問題が発生した。ロケットの発射の音を聴かずにアクションを起こしたり、自分が楽しい動き（図3に見られるように、発射成功なのに倒れこんでしまう）を優先してしまう幼児も散見された。そこで「音をよく聴いて動いてね」「次は成功か失敗か、どんな音が出るか、耳を澄ましてみよう」などの言葉かけをおこなった。すると、図5のように耳に手を当てて行進する幼児も現れた。その一方で、参観教員の意見に挙げられたように、やはり発射の成否のみに関心が向く幼児もいて、この部分の課題が浮き彫りとなった。



図5 耳に手を当てて行進する

(2) 参観教員のリフレクション

- ① 今回は、ロケットということで、楽しくロケットの発射を真似する子どもたちであったが、発射が成功したのか失敗したのか聴き分けできていない子が少なく、失敗したときに寝転がることを楽しむ子が多かったように感じた。
- ② 消防車のサイレンの真似は、最初はできていたが、繰り返していくとサイレンの真似をするより失敗して転ぶことに楽しさがいってしまったので残念だった。裏声は前回よりもきれいにできていた。

- ③ ロケットの3・2・1発射！をととても喜び興味を示す中で積極的に活動に取り組んでいた。発車失敗から火事→消防車の流れが子どもたちにイメージしやすく、一人ひとりが「ウー」と声を出して楽しんでいた。なかには高い声を出すのではなく、失敗で倒れることを中心に楽しんでいた子どももいた。活動を繰り返すことで、より一人一人がねらいを意識し達成に近づけたと思った。
- ④ ロケットの発射、消防車といろいろなものに変身することをとても楽しんでいた。前回の汽笛もよく覚えており、体を動かしながら声を出すことでより楽しめた。

IV. まとめ

この活動を幼児たちが楽しんでいたことは上述のとおりである。それに加えて、年度末（2020年3月）の最後の指導の際に「どの活動が楽しかったか」をB幼稚園の幼児たちに尋ねたところ、真っ先に「ロケット」という答えが返ってきた。この反応は年長の3つのクラスすべて同じであったので、この活動が幼児たちにとって印象深く、楽しいものであったことが確認できた。

研究初年度（2019年度）は、さまざまな活動をおこなってきたが、「音楽指導（活動）と遊びを連携させる」点においては、この「ロケット発射」の活動は最も成功した例であったと考える。

しかし一方で、肝心の裏声の感覚をつかむことや声そのものへの関心、音を聴き分けるなど、音楽指導の中心となるべきねらいが十分に達成することができなかったことについては改善が必要である。今回の活動では、幼児たちの関心、いわば「遊びの中心」が指導者側の意図するものとずれてしまったことが、活動の成否両面を生み出した原因であると考ええる。

本活動を「遊びの中心のずれ」という観点で改めて見直し、改善を図ることはもちろん、今後の活動の計画づくりにおいても「遊びの中心」という視点を取り入れ、研究を継続していきたい。

なお、本研究はJSPS科研費JP19K02665（基盤研究C）の助成を受け、実施している。

注・文献

- 1) 長川慶（2017）：幼児の歌唱活動における問題点と指導のあり方―新しい歌唱指導法の開発にむけての基礎研究―一，保育文化研究，5，85-98.
- 2) 長川慶（2013）：児童に対する発声指導についての一考察―基本となる発声についての考え方とその指導法―一，暁星論叢63，79-108.
- 3) 長川慶（2018）：幼児への発声指導の実践と考察―頭声発声の有用性に着目して―一，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，17，187-194.
- 4) 長川慶（2020）：発声指導を用いた幼児の表現活動におけるコンピテンスと感性的表現力の向上の取り組み―4歳児への第1回目の指導とその考察―一，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，19，119-126.
- 5) 坂東貴余子編（2014）：簡易伴奏による子どもの歌ベストテン，ドレミ楽譜出版社，東京，107
- 6) 長川慶（2019）：発声指導に関する授業実践とその考察―頭声からの声づくり―一，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，18，65-72.

